

卷頭言

新しい『日本呼吸器学会誌』の
スタートに際して

日本呼吸器学会和文誌編集委員長 藤田 次郎
(琉球大学医学部附属病院院長)



私が初めて書いた論文は、ニューモシスチス肺炎 (*Pneumocystis pneumonia*: PCP) の症例報告であった。虎の門病院のレジデントであった際に、上級医の中田紘一郎先生のご指導で執筆したものであり、内容は、ニューモシスチス肺炎においては、画像所見に比して聴診所見が乏しいというものであった。自分の書いたものが活字になった喜びもあり、この症例報告は今も私の宝物である。その後も折に触れて、多数の症例報告を書いてきた。論文になった症例は、永遠に記憶に残ると感じている。

『日本呼吸器学会誌』は、原著論文に加え、多くの症例報告・画像診断などを掲載する貴重な雑誌である。呼吸器内科医を目指す若い先生方が、最初の論文を執筆する場として大いに活用してほしいと思っている。ただし編集委員長として期待するのは、投稿された論文のなかに originality を含むことである。症例報告においても、これまでの知見に新しい切り口を追加し originality を含めるよう工夫することは重要で、この点、上級医の関与が求められる。また献身的に努力していただいている査読責任者の負担を減らすためにも、上級医の先生方の積極的な論文指導、および校正をお願いしたい。

昨年は『日本呼吸器学会誌』編集の大きな節目となった。これまでのエルゼビア・ジャパン社が和文誌から撤退することとなり、新たにアンデパンダン社が担当することになった。私はそれ以前のK社が担当していた時代、その後のエルゼビア社、そして今回のアンデパンダン社、と経験することになる。K社の時代は、査読責任者を務めていたものの、最終校正で多数の誤りがあることが気になっていた。以前に編集委員長を務めていた広島大学の河野修興名誉教授がこの点をしばしば指摘されていた。エルゼビア社に変更後は、原稿の完成度が高く、校正作業は楽になった。さてアンデパンダン社の選定は、公募してきた3社から、臨時的編集委員会も含め、2回の編集委員会で決定したものであった。決定の要素は、代表取締役の藤田加代子さまの圧倒的な校正力であった。まだ変更したばかりでお手並み拝見といった段階ではあるものの、『日本呼吸器学会誌』に新風が吹き込んだ印象がある。「アンデパンダン」の語源は、フランス語の Indépendants (独立した人たち、の意) から由来する。我々は呼吸器内科学を究めることを目指しているが、同じく独立した求道者の香を藤田加代子さまから感じる。校正原稿の質も含め、今後の編集作業が楽しみである。